

氷細工

町田市立南第三小学校 六年 原^{はら}彩七^{あやな}

キヤツキヤツという子どもの笑い声が、公園に広がる。そのすぐそばでは、『氷細工』と書かれた看板の店の中から、人の良さそうな若者が、子どもたちを見守っていた。すると不意に店の扉が開き、男が入ってきた。男はグルリと店内を見回したあと、若者に気づき、

「氷細工ってなんだい？」

と尋ねた。若者は、

「氷細工とは、飴細工を氷にしたものです。少し砂糖をまぶして、甘く味付けをしています。」と説明した。男は、氷細工が何か分かったらしく、メニュー表を開いた。メニューには、スーパーマン、プリンセス、アニメのキャラクター、鳥、猫、犬など、他にも数十種類ある。どれにしようかと男が迷っていると、若者が

「この店の氷細工の面白いところをお話ししましょうか？」と、声をかけた。

「じゃ、頼むよ。」と男が返事すると、若者はさっそく話し始めた。

「この店の氷細工は、自分が食べたものと同じものになれるんです。つまり、スーパーマンの氷細工を食べれば、スーパーマンになれる、ということなんです。もどに戻りたければ、『元に戻れ』と呟けばいいんです。」

若者のこの説明に、男は

「本当かい？」

と、疑った。すると、若者は、

「嘘だと思ふなら、これを舐めてあの公園にいる子どもたちを見てください。」

と言い、男に丸い氷細工を渡した。

「形はマルなので変身は出来ませんが、変身している人を見分けることができますよ。」

男は、その氷細工を口に入れ、子どもを見た。そして、目を見開いた。子どもではなく、アニメのキャラクターが遊んでいる。

「見えましたか？」

と聞く若者の言葉に大きく首を縦に振り

「本当なんだな。」

と言った。男はまだ興奮している様子で、

「それじゃ俺は、空を飛んでみたいから、鳥の氷細工を買おうよ。」
と、頼んだ。若者は、

「ありがとうございます。では、最後に一つ説明させてください。」
と言った。

「この氷細工には、危険なところがあります。それは、氷細工が溶け終るまでに元に戻らないと、変身したままになってしまう。という点です。だから、氷細工が溶け終わるまでに、絶対に元に戻ってください。」

「わかった。約束する。」

そう言う男に、若者は微笑んだ。そして、もう一度口を開き、

「実は私も戻れないですよ。」

と言いながら、上着をぬいだ。

「数年前に『天使』の氷細工を食べたつきり、このままなんです。」

いたずらげ

悪戯気に笑う若者の背中には、真っ白な羽がついていた。

審査員講評 *****

作品の世界に引き込まれるように、あっという間に読んでしまいました。公園で遊ぶ子供の姿など一つの描写が具体的に、それによって物語がより鮮やかにイメージできましたし、最後の展開にはなるほど！と驚かされました。